

平和の大切さと後世へ

市遺族会
上諏訪地区

体験記録文集を作成

諏訪市遺族会上諏訪地区は、遺族の体験を記録した文集「我が家の戦中戦後の回想記」を作成した。会員18人が原稿を寄せ、戦争で親族を亡くした悲しみと残された家族の苦難をつづった。出征時の家族写真や戦地から届いた手紙、家族に宛てた遺書なども掲載されている。

ロシアのウクライナ侵攻を

受け、戦争体験を語り継ぐ必要性を感じ、役員の総意で昨年の総会に提案した。文集はB5判約60。会員が執筆した回想録と、昨年の市戦没者追悼式で読まれた市遺族会長と小学生(当時)の追悼文、英霊を祭る諏訪護国神社や、大和区と南澤区にある慰霊碑の写真が掲載されている。追悼文では、23歳で戦病死

した兄を思う93歳の弟の人生、トラック島で餓死した父親の命日にカボチャを供える娘、ある遺族は「私は父の顔を知りません。こんな悲しいことがおきないように、平和な世の中になってほしい」と記した。

市遺族会上諏訪地区の会員は83人。平均年齢は80歳代という。戦没者慰霊法要と総会が6月17日、同市諏訪2の貞松院であり、文集を披露した。編集委員代表で上諏訪地区湯の脇・大和支部の中澤正一支部長(82)は「大切な人との死別の悲しみ、戦中戦後の苦難を乗り越えてきた遺族には、戦争を知らない人たちに語り継ぎ、『平和の大切さ、ありがたさ』の意識を高揚させる役目がある」と語り、文集の活用に期待を寄せた。

130部作り、会員や市遺族会、市図書館、上諏訪地区内の小中高校に寄贈する。必要に応じて増刷し、子や孫の世代に伝えていくという。



完成した文集を手にする編集委員の中澤正一代表と久保田正彦さん